

「参考資料」 志賀直哉・谷崎潤一郎・吉井勇

「鼎談 京の春を語る」

高森松子・清水康次編

解説

昭和二十三（一九四八）年五月一日発行の雑誌『苦楽』第三巻第五号に、「鼎談 京の春を語る」という座談会が掲載されている。その座談会を中心に、数多くのコラムや詩歌欄を組み入れ、京都の山々や風物のカットをはじめ込んで、青赤二色刷りの十五ページに仕立てられたものが、「特輯色頁 京の春」と題されている。その扉のページは、上村松園が絵を描き、絵を背景にして、「京の春」序歌」として吉井勇の短歌五首が掲げられており、また、「構成・吉井勇」という記載がある（本誌口絵3頁参照）。中心となる「鼎談 京の春を語る」の出席者は、志賀直哉、谷崎潤一郎、吉井勇。吉井が司会を務めている。

「谷崎潤一郎と京都」というテーマで共同研究を進める中で、この座談会の記事を読み、谷崎と京都とのかかわりを考える上で役に立つものと思われたが、『苦楽』の原本以外に見る手立てがないので、この「研究報告書」に再刻してみることにした。谷崎は、この時期多くの座談会に出席し、雑誌等に掲載されている。その細目については、千葉俊二編「対談・座談一覧」（紅野敏郎・千葉俊二編『資料 谷崎潤一郎』一九八〇・七、桜楓社、所収）があり、この座談会もリストアップされている。谷崎に限ったことではないが、座談会というものについては、資料として紹介されているものもあるが、多くが個人全集などにも収録されず、あまり顧みられていない。この再刻が、座談会というものを、資料として再評価するための一助となれば幸いである。

雑誌『苦楽』は、昭和二十一年（一九四六）年十一月から二十四（一九四九）年九月まで、四年間にわたって刊行された文芸雑誌である。全三十四冊。ほかに、臨時増刊が五冊、『苦楽・海外版』と称する再編集のものが五冊ある。発行は苦楽社。編集長は須貝正義。編集の後ろ盾となったのは大仏次郎で、大仏は各号の巻末に「坐雨蘆」の名で「編輯後記」を書いている。表紙は錦木清方（本誌口絵3頁参照）。小説・随筆等に著名な作家の寄稿を並べる。小説には挿絵を配し、例えば、大仏の「鞍馬天狗 新東京絵図」が岩田専太郎の挿絵で連載されるなど、大衆性も多く取り入れている。巻頭に写真口絵を数頁置いたり、例えば「にこりえ（樋口一葉作）木村莊八」のように、明治大正期の作品の名場面を抄出し、色刷りの挿絵とともに並べた「名作絵物語」を連載したり、二色刷りの特集コラムを数頁連ねたりと、視覚に訴える形での娯楽性を旺盛に取り入れている。『苦楽』発行の顛末については、須貝正義『大仏次郎と「苦楽」の時代』（一九九二・一一、紅書房）があり、大村彦次郎『時代小説盛衰史』（二〇〇五・一一、筑摩書房）にも、華やかな船出と失意の終焉が記されている。

この座談会の出席者である、吉井勇、谷崎潤一郎、志賀直

哉の三人には、それぞれに京都在住の時期がある。吉井勇は後半生を京都で過ごし、谷崎潤一郎は晩年の前半期を、志賀直哉は、その青春の一時期と壮年の一時期とを京都で暮らしている。簡単に、三人の京都在住を振り返っておこう。

吉井勇は、明治十九（一八八六）年、東京に生まれる。昭和十三（一九三八）年、五十三歳のときに、京都の自然に抱かれた、静かな後半生を送ろうとして、左京区北白川東蔦町に居を構えた。その後、昭和十九（一九四四）年には、東山区岡崎円勝寺町に転居、一時富山県に疎開していたが、昭和二十（一九四五）年には、京都府綴喜郡八幡町月夜田に、昭和二十三（一九四八）年には、上京区油小路元誓願寺頭町に移り、さらに、昭和二十六（一九五二）年、左京区浄土寺石橋町に転居している。

谷崎潤一郎は、明治十九（一八八六）年、吉井と同年に、東京に生まれる。創作活動を始めてまもない、明治四十五（一九一二）年、京都に遊ぶ。大正十二（一九二三）年、関東大震災での被災の後、一時京都に在住。同年、六甲苦楽園に移り、昭和の戦前の時代を阪神間で送る。戦時下での熱海、岡山への疎開の後、昭和二十一年（一九四六）年、京都に居を求め、左京区南禅寺下河原町（前の潺湲亭）に転居。昭和

二十四（一九四九）年には、左京区下鴨泉川町（後の潺湲亭）に移り、以後、寒暑の時期は熱海の別荘で暮らすという移動生活をしながらも、京都を拠点とする。昭和三十一年（一九五六）年、京都を引き払い、昭和三十九（一九六四）年には、神奈川県湯河原町吉浜（湘碧山房）に転居している。

志賀直哉は、明治十六（一八八三）年、陸前石巻（宮城県）に生まれる。明治四五（一九一三）年、谷崎と同じ時期に、『白樺』の第五回美術展覧会を開催するために京都に逗留する。同年、父と争い、家を出て、尾道に住み、放浪の時代が始まる。大正三（一九一四）年から翌年にかけて、京都市上京区南禅寺北の坊、また、一条御前通西五丁衣笠園に居住するが、短期間に終わり、赤城山大洞を経て、千葉県我孫子に移っている。大正十二（一九二三）年、改めて京都に居を求め、上京区粟田口三条坊に転居。同年、山科村大字竹鼻小字立原に移り、大正十四（一九二五）年には、奈良に移る。奈良で十三年間暮らした後、東京に帰り、以後東京に在住した。この座談会が掲載された、昭和二十三（一九四八）年春には、吉井と谷崎は京都に、志賀は東京に暮している。この座談会から浮かび上がるものは多いが、しきりに話題とされている古典芸能についてだけ、一言述べておきたい。

それは、彼らにとつて、また彼らの世代にとつて、芸能や作曲は、従来考えられてきた以上に重要なものとしてあり、創作活動にも意外に大きな影響を与えていたということである。その例示として、この座談会でも話題になる地唄の名曲「雪」について、谷崎がちょうどこの時期に書いている、「雪」（一九四八・一〇、『新潮』）という文章を引いておきたい。

谷崎は、「雪」という曲を詳しく紹介しながら、「およそ古来の日本音楽で此のくらゐ、しん／＼とした冬の夜の感じ」を捉えたものはないと述べ、曲の伝える世界を想像力豊かに描き上げる。聴こえてくる「雪と鐘」は、「純粹に日本のもの」であり、「関西の土地のもの」であると述べている。

私にはこれらのものが実にはつきりと、我が手を以て触れるが如く見えることがある。私には又その女が聴き入つてゐる鐘の音（嗟峨とすれば清涼寺あたりのもののであらうか）がきこえ、降りつもる雪にひとしほ底冷えする冬の夜の寒さが、（中略）京都特有の凜烈な寒さが、ひし／＼と身に迫るのが感ぜられる。（中略）私はしば／＼自分自身が遠い昔にその女を知つてゐたやうな、その庵室も、その嗟峨の夜も、その雪景色も、自分に至つて親しみ深いものであるやうな、……今もなほその場所

へ行けばその女が住んでゐるやうな気がするのである。

谷崎の中で、音曲というものが、具体性と現前性を備えた想像の世界を形作っていたことが知られる。音曲は、創作に對して、例えば「源氏物語」などと同様の典拠ともいえるほどに、強い喚起力や影響力を持っていたといえるだろう。

なお『苦楽』の当該の号の巻頭には「名作絵物語」のシリーズとして「春琴抄（谷崎潤一郎作）和田三造」がカラー版で八頁、巻末に河盛好藏「名作絵物語解説「春琴抄」について」一頁が掲載されている。この座談会については、志賀直哉の昭和二十三（一九四八）年一月二十四日付の上司海雲宛書簡に「一昨日は谷崎 吉井君等と苦楽の座談会を熱海でしました」とある（『志賀直哉全集』第二〇巻、二〇〇〇・一〇、岩波書店）ので、一月二十二日に行なわれたものと思われる。

凡例

一、以下は苦楽社の雑誌『苦楽』五月号（昭和二十三年五月）に掲載された特集「京の春」（一一頁〜二五頁）のうち、「鼎談 京の春を語る」を再刻したものである。組み込まれているコラムは脚注欄に一覧表を挙げ、松本佐多の

もののみ、座談会の内容の参考になると思われるので、脚注欄に再刻した。

一、漢字の旧字体は新字体に改めたが、仮名遣いは原文にしたがった。

一、原本での掲載頁について、各頁の冒頭を 11頁 などの形で記した。

一、人名、事項等について、簡単な脚注をほどこした。

一、文中に現在においては不適切な表現がみられるが、あえてそのままの形で出すこととした。

11頁 中扉

色頁特輯／京の春／扉絵 上村松園／構成 吉井勇

「京の春」序歌

吉井勇

かくてわれ幾いづく春京に住むことぞもの思ふよりなすこともなく
よみがへり来る京のおもひで二三あり鴨東竹枝うずまき読みゆくほどにかへらざる春を歎けば京に十年住むおのれさへ寒しとぞ思ふ
京の春のむかし思ひてわびしみぬ嗟なげ暇の思ひ出宇治の思ひ出
西鶴の艶やまひんしや隠者めくころもて京わびずみの春を過さむ

京の春を語る

鼎談

出席者

志賀直哉

谷崎潤一郎

司会 吉井勇

吉井 それでは、ぼつぼつ始めませうか。僕はこんなことは甚だ慣れないんだけど、引受けた以上はなるべく面白い座談会(1)にしたいと思ひますが、要するに「京の春」といふことが主題なんです。それでは何か取止めもなく、のんびりとした話をお願いしたいと思います。

谷崎 京都の春ですか。はあ、はあ。

吉井 まづ桜ですか。

志賀 京都の春はあんまり賑やか過ぎてネ、やつぱり春が済んだ時の新緑のほうがいいと思ふな。僕は震災の年の春に京都へ(2)いつて、粟田口(2)にゐたら、何だか、落着かなくて困つた。

谷崎 さうかなア。

志賀 (肯いて) 家を持つたら、ね。

吉井 その後住んでゐられた山科の方は、粟田口よりは落着くでせう。

志賀 ええ。

1 座談会 『苦楽』に掲載された座

談会は少なく、ほかには、第四卷第一号(一九四九・一)の辰野隆・高田保「世相撫で斬り・対談」、同卷第十号(一九四七・八、臨時増刊号)の久保田万太郎・小島政二郎・安藤鶴夫「鼎談 伯龍の芸と人」などがある。

2 震災の年の春に京都へいつて 一九二三年三月に、東京から京都市上京区粟田口三条坊四二に転居したことをいう。当時の志賀は、社寺の景物と京都国立博物館の東洋美術の見学にあぐれ、来客も多かった。

吉井 山科にはどのくらゐ住んでゐられたんですか――。

志賀 一年半。

谷崎 山科ほどのへんです。僕は栗田口のはうは知つていふけど。

志賀 奴茶屋の所から入つた所です。なかなかいい所だつたんですけどネ。

吉井 山科からは近いから醍醐の方へもゆかれたんでせう。

志賀 ええ、上醍醐へも二度程登りました。

谷崎 醍醐のあれは、何院でつたつけね、あの寺……。

吉井 三宝院？

谷崎 あ、三宝院。あそこの枝垂れ桜つていふものは、全然駄目になつちやつたね。

志賀 さう？

谷崎 花があんまり付かなくなつちやつてネ、元はとてもよかつたけど……。あれは惜しいナ。

吉井 谷崎君が一番好きなのは、やつぱり平安神宮の桜だね。

谷崎 祇園の夜桜も好きだつたナ。もう衰へたけど。

吉井 さう。お能の老女物でも見てゐるやうな感じの桜で、品がよく、それでゐて艶なところが好きだつたよ。

谷崎 ほかの桜と違つてね、衰へてからがなかなかよかつた。二、三年前までよかつたね。

志賀 僕は大体桜は余り好きな方ではないが、あの桜はよかつた。

谷崎 今は全然花がつかないから駄目だけど、二、三年前まではよかつたナ、気

1 醍醐 醍醐寺は創建（八七四年）

以来、醍醐山頂の「上醍醐」と、醍

醐天皇の庇護による山麓の「下醍醐」

がそれぞれ発展、一時荒廃したが、

豊臣秀吉の「醍醐の花見」によつて

復興した。下醍醐の三宝院にあるオ

オベニシダレは豪華絢爛そのもので

ある。毎年四月、「豊太閤花見行列」

が開催されている。

なお、上醍醐寺の本堂、准胝堂は

二〇〇八年八月に落雷（と思われる

原因）により全焼し、本尊の准胝観

世音菩薩も焼失した。

2 平安神宮の桜 神苑には池を中心

に広大な回遊式庭園があり、ベニシ

ダレザクラの名所となっている。谷

崎潤一郎「細雪」の場面を彩つた。

3 祇園の夜桜 円山公園の桜と考え

られる。日本で最も有名な枝垂れ桜

といつても過言ではないであろう。

現在は二代目ながら、大きな枝を広

品があつたね。

志賀 若返り法をやつて、一時た 13頁 いへん元氣になつたと思つたら、やっぱり駄目だつたね。若木の根の方を何本も接木するやり方だつた。

谷崎 ああ、さうさう。だけでも、ちよつと治つたでせう。

吉井 樹の周りに馬酔木を植ゑると若返るといふので、大分植ゑてましたが、結局駄目だつたやうですね。

谷崎 さういへば馬酔木が多いね、京都には。

吉井 ええ。しかし京都よりも奈良が多い。

志賀 あの二代目にするのだとかいふのがわきに植ゑてありましたね。あの若返り法でよくなるかと思つたが、矢張り駄目だつたね。

吉井 あの桜は僕は好きだつたナ。夜の篝火の光で見る時などは殊によかつた。

谷崎 よかつたね、確かに。

吉井 如何も小説と事実と混同してしまふやうですが、谷崎君は毎年あそこを見るんですか、平安神宮の桜を。

谷崎 毎年見るんです。

吉井 「細雪」の中でも平安神宮の桜を見るあたりは、殊にすぐれてゐると思ひました……。

谷崎 始終見ます。好きだから。それから、あそこの花がいいね、花の寺……。

吉井 ああ、大原野村の花の寺。(2) あすこの桜はまだ見ないが、もの寂びてゐていいさうですね。

谷崎 小さい西行庵のあつた所。

げ咲き誇る姿には息をのむほどの美しさがある。

他に祇園の桜としては白川の桜が名高い。大友跡の「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕のしたを水のながるる」と歌人吉井勇が詠んだ風情が今も十分残っている。

1 平安神宮の桜を見るあたり

「あの、神門を這入つて大極殿を正面に見、西の廻廊から神苑に第一歩を踏み入れた所にある数株の紅枝垂、(中略)此の一瞬こそ、二日間の行事の頂点であり、此の一瞬の喜びこそ、去年の春が暮れて以来一年に互つて待ちつゞけてゐたものなのである。」(「細雪」上巻・十九)

2 大原野村の花の寺 京都市西京区の勝持寺。平安末期、西行はこの寺で出家し、庵を結んだ。

吉井 あれも物寂びた花だナ。

谷崎 なかなかいい。

志賀 立派な樹ぢやないけど大和の長谷寺⁽¹⁾に、ちやうど花時分⁽²⁾にいつて大変美しく思つたことがある。上から見たらいろいろな種類の山桜⁽³⁾があつち、こつちにあつて、非常にきれいだと思つたナ。赤味のさしたんだの、白いんだの、右近桜⁽³⁾もあつたナ、いろんなものがあつて、よかつたナ。

吉井 それから疏水のふちの桜、あれもいいですね。

谷崎 あれはナニが植ゑたんだけつてね、関雪⁽⁴⁾が……。

吉井 全部じゃないでせう。銀閣寺の関雪邸の前あたりだけぢやないでせうか。今あすこにはその事を唱つた関雪の詩の碑が建つてゐます。

谷崎 さう、あの疏水のふち。

吉井 あの疏水の水の面は、ひとしきり落花で真つ白になつてしまふほどです。

谷崎 ああ、君はあそこいらにゐたから、よく歩いてたんだね。

吉井 ええ。あの時分は毎日のやうに歩いた。

志賀 京都の町の中と八幡あたりと、どうです、暖かさは。

吉井 それはね、八幡⁽⁵⁾のほうがいくらか——三、四度温い、といふところかナ。

ズツと南ですから。

志賀 日当りはどうなの。

吉井 とてもいいです。南と東があいてるから。

谷崎 宇治の興聖寺にね、ズツと山吹があつたでせう？

吉井 ええ、ええ。

1 長谷寺 奈良県桜井市にある真言宗の寺院。古くから「花の御寺」と称されている。

2 山桜 日本に自生するサクラの野生種の一。

3 右近桜 鬱金桜(うこんざくら)と書くのが正しい。花びらは、うす綠色をしている。

4 関雪 橋本関雪。一八八三〜一九四五年。日本画家。現在、白沙村莊橋本関雪記念館となっている旧関雪邸前(銀閣寺道)の桜は、関雪の妻が植ゑ始めたもので、「関雪桜」と呼ばれている。なお、この対談から三年後の一九五一年五月、関雪の孫千萬子は谷崎夫人松子の長男と結婚、谷崎家の一員となる。

5 八幡 吉井勇は、一九四五年十月から一九四八年八月まで、八幡市八幡月夜田の宝青庵という寺を借りて住んでいた。

谷崎 あそこ、山吹の名所だつたけど、あれ、なくなつちやつたね。⁽¹⁾

志賀 あの川つぶちの門から上つた所？ 琴坂とかいふ。

谷崎 ええ。あれ、両側にズツとあつたけど、いま殆どないね。

吉井 (谷崎氏に) 君はナンだらう、仁和寺の山桜⁽²⁾なんか嫌ひだらう。

谷崎 ああ、あまり好かないね。だけれども、時期を失しちやつて、お花見ができ

なかつた時は、仕方がないから、あそこへゆくんだ。しやうがないから……。

志賀 京都の桜は何処が一番先きかナ。祇園が先きで、その次が嵐山……。

谷崎 さうですナ。祇園、その次が嵐山。あの御室は二十日過ぎですナ。たいがい二十日過ぎだ。

志賀 東京の桜は染井吉野⁽⁴⁾とかいふのが多いけど、あれは関西には殆どないの？

谷崎 いやア、案外関西に多いんぢやないかナ。

吉井 多いでせう。

志賀 僕は山桜は嫌ひぢやないけど、どうもあの桜は興味がない。

谷崎 あれは多いナ。ここら(熱海)あたりも多いです。

志賀 どうしてあんなものを殖や^(14頁)しているのかね……。

吉井 志賀さんは、昔、郡君⁽⁵⁾だの何だのがよく祇園へいつた時、一緒にゆかれた

の？

志賀 郡はどうだつたか忘れたけど、ゆくことは……。

吉井 あの時は都をどりは⁽⁶⁾。

志賀 さう、よく見に行きました。あの頃の女紅場⁽⁷⁾(によこうば)は今あるの

前にあつた小さな建物でした。

1 なくなつちやつたね 興聖寺の山吹がなくなつたことは、「京洛その折々」(一九四九年)にも見える。

2 仁和寺の山桜 「御室桜」の名がついている。「花(鼻)が低い」ということから「お多福桜」ともいう。

3 嵐山 鎌倉時代の前期、後醍醐院が、離宮の対岸の嵐山に吉野山の桜を多く移植して以来、花の名所として有名になる。

4 染井吉野 オオシマザクラとエドヒガンとの雑種。幕末、江戸染井の植木屋から売り出された。現代の観賞用サクラの代表種。

5 郡君 郡虎彦^(こむらたけひこ)。一八九〇〜一九二四年。劇作家。「白樺」同人。

6 都をどり 毎年四月に京都祇園の歌舞練場で催される舞踊の会。

7 女紅場 芸妓・舞妓に、技芸のほかに行儀作法、華道、茶道、裁縫などを教える。

吉井 都をどりはどうです。

志賀 僕はわりに好きだな。だけでも、若い頃は何だか情緒があつたやうに思つたけれど、今は……。あれはどうなのかね、こつちの主観なのか、それとも踊の方にさういふものが抜けてきたのか、ねえ。恐らくこつちが年をとつて主観的にさういふものを感じなくなつたのかも知れないけど。

吉井 谷崎君は都をどりを昔書いた「朱雀日記」⁽¹⁾の中ではあんまりよく言つてないけど……。

谷崎 あの時は厭だつたけど、今になるとやつぱり懐しいね。

志賀 吉井さんが京都にチャンと定住したのは。

吉井 定住したのは昭和十三年の秋以来ですよ。

谷崎 長田幹彦⁽²⁾がね、明治——あれは四十何年かナ、大正になる前の春に三本木の信楽⁽³⁾に来たんでね、僕がいつたら、白樺派の人がついこなひだまでここに泊つてたツていつてた。有馬生馬⁽⁴⁾君だの、ね。あなた(志賀氏)も一緒だつたの。志賀 あそこは園池⁽⁵⁾が前から知つててね。京都にゆけば僕達の仲間は皆信楽へいつた。

吉井 あなた(谷崎氏)もあそこに泊まつたの。

谷崎 幹彦があるから、あそこへいつてお客さんで泊まつたことはあるけど。

志賀 あれはどうかしらん。神田川は、今もやつてるのかしら。

谷崎 やつてる。ズツとやつてるけどね。

志賀 大阪の竹葉⁽⁶⁾は。

谷崎 やつてるんです。

1 「朱雀日記」 谷崎は一九二二年

四月、新聞に連載する約束で京都へ出かけた。その見物記が「朱雀日記」である。同年四月―五月『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に連載。

2 長田幹彦 一八八七―一九六四年。

小説家。『祇園』(一九一三年)『鴨川情話』(一九一五年)などがある。

3 三本木の信楽^{しんがら} 谷川あい(お愛さん)が経営していた宿。与謝野晶子、

上田敏、新村出、島村抱月、近松秋江、長田幹彦、その他『白樺』同人

たちの京の宿であつた。現存しない。

4 有馬生馬 一八八二―一九七四年。

洋画家、小説家。『白樺』同人。

5 園池^{そのいきんえん池} 園池公致。一八八六―一九七四年。小説家。『白樺』同人。

6 大阪の竹葉^{たけようてい} 竹葉亭。江戸前の鰻蒲焼きを中心にした懷石料理店。江戸時代末、江戸京橋で創業。昭和初期に大阪に出店。

志賀 焼けなかつたの。

谷崎 あれは焼けなかつた。——僕は明治四十五年に京都へいった、その前の年に（吉井氏を見て）君がいつてるんだね。君の噂がずいぶんあつたよ。吉井さんがかうかう、だなんて。

吉井 僕がいつたのは……明治四十三年頃、原稿料を始めて十円ばかり貰つたので、それで出懸けて往つたのだが、その当時第三高等学校の教授をしてゐた茅野蕭々⁽¹⁾君の家に泊めて貰つて、鴨川踊なんぞを見せて貰つたのを覚えてゐます。

谷崎 鴨川踊⁽²⁾があつたのなら五月15頁⁽³⁾だね。——一番初めにいつた時ぢやないかも知れないけど。

吉井 たしかその時だつたよ。今三条小橋の万屋旅館の主人になつてゐる金子竹次郎君に案内されて祇園に往つたり何かしたのは。

谷崎 僕がいつた時に、金子さん、君を知つていたもの。それからお多佳⁽³⁾も、多分会つてるんだよ、もう。

吉井 あの時分は上田敏⁽⁴⁾さんが京都にゐる時代で、君と長田君をご馳走したり何かしたことがあつたよ。

谷崎 さう、御馳走になつたんだ。瓢亭⁽⁵⁾へよばれてね。

吉井 君のあの時の原稿があるんだ、朱雀日記の原稿が——。

谷崎 君ん所に？ ほーう、そりやア珍しいナ。初めて聴いた。

吉井 僕の所へ贈ってくれたのは、落語家の先々代蝶花楼馬楽⁽⁷⁾を贖負⁽⁷⁾にしてゐた鈴木台水といふんですが、それが毎回原稿紙が違つてゐて、墨で書いたのがあつたり、それからペンで書いたのがあつたり、いろいろなんですよ。（笑声）

1 茅野蕭々 本名茅野儀太郎。一八八三—一九四六年。ドイツ文学者。

2 鴨川踊 京都先斗町の舞妓・芸妓が、毎年春秋二回、鴨川沿いの先斗町歌舞練場で興行する舞踏の会。

3 お多佳 磯田多佳女。京都祇園の御茶屋「大友」の女将。谷崎や吉井勇、夏目漱石など多くの作家・画家と交流があつた。谷崎による追悼の記「磯田多佳女のこと」（一九四六年八月—九月『新生』）がある。

4 上田敏 一八七四—一九一六年。詩人、評論家、英米文学者。

5 瓢亭 元禄中期創業の老舗料亭。その味を谷崎は絶賛、「細雪」をはじめ多くの作品に瓢亭が登場する。

6 朱雀日記の原稿 吉井「朱雀日記」（『雷』一九四二年）に言及がある。

7 蝶花楼馬楽 三代目蝶花楼馬楽。一八五八—一九一四年。落語家。吉井に『蝶花楼物語』（一九四七年）

谷崎 当時が惚ばれるなア。ハツハツハ。

吉井 今度ひとつ見せようかな。

谷崎 さうだ、その前に新聞記者で小川つていふ人だつたかな……。

吉井 さうさう、小川といふ人がゐたな。

谷崎 その人だつたか、外の人だつたか、とにかく君のよく知つてる人だよ、それが僕と幹彦君を岡崎の上田先生¹⁾の所へ連れていつたんだ。あれは聖護院の近所だつたね。

吉井 さうだ。竹の垣根の家だつたナ。²⁾

谷崎 「このベルを押せ」といふことがフランス語で書いてあつた。

吉井 さうだ、さうだ。

谷崎 どこから引越して移つて来たばかりの家らしかつたね。電気屋なんぞが来て、いろいろやつてた。そこへいつた。それから上田敏さんが僕を瓢亭へよばれた時に、敏さんがシャツを着てたんだよ。³⁾和服だつただけだね。それで、洒落た風をしてるんだけど、シャツを着てるのはをかしいつて書いたんだ。さうしたら、こなひだ嘉治君⁴⁾(隆一、上田敏氏の女婿)に会つたら、上田さんはあのあとで、シャツが見えないやうに気をつけてただけど、見られちやつたねツて言つてたといふ話を聞いたよ。

吉井 なかなかお洒落だつたからナ。

谷崎 懐中時計をここんとこ(袂のあたり)へ入れてたよ。帯に挟んでないんだ。それをふところから出して見てたよ。お酒飲んで、いろいろ言ひたかつたらしいんだけど、幹さんも僕も堅くなつちやつてたもんだから、かへつて言へないらしい

がある。

1 岡崎の上田先生 上田敏は、一九〇九年五月に京都帝国大学教授となり、六月に京都市岡崎広道入江に居をかまえた。

2 竹の垣根の家だつたナ 吉井勇も一九一〇年五月、京都に来て上田敏宅を訪問している。「さかづきす岡崎に住む先生の髭なつかしといへる女に」(『酒ほがひ』「祇園冊子」)。
3 敏さんがシャツを着てたんだよ

「当日先生は東京風のイヤ味のないう和服の着流しで、その好みには五分の隙もなかつたけれども、下に白いメリヤスのシャツを来てをられるのが聊か気になつた。」(『青春物語』)
4 嘉治君 嘉治隆一。一八九六〜一九七八年。政治評論家。

かつたナ。ずるぶんをかしかつたよ。

吉井 まだ上田さんは若かつたでせう。

谷崎 若い若い——。

吉井 三十台？

谷崎 そんなに若かつたかな。……いや、さう若くは——。

吉井 死んだのが四十いくつだから。

志賀 あの人は明治生れだもの、ね。とにかく。

谷崎 四十台ぢやないかい。——夏目さんと同じ年恰好でせう？⁽¹⁾

志賀 夏目さんより二つ三つ下ぢやないかな。夏目さんが慶応三年だからね。

谷崎 あ、さう……。

志賀 明治四十年に掛つてれば、もう四十近いんだよ。

谷崎 若かつた。とにかく可なり若かつたね。

志賀 四十年に掛つてたの。

谷崎 ええ。掛つてたどころぢやない。四十五年ですよ。⁽²⁾

志賀 それぢや四十過ぎだ。

谷崎 僕が東京へ帰つて来たら、16頁明治天皇がなくなられたんだから。

吉井 君はあの時、大分長くゐたのかな。

谷崎 さう。だけど、幹さんの方が長かつたかな。——いや、僕より幹さんのはうが先きに帰つて来たんだ。僕は動けなかつたんだよ、⁽³⁾(笑聲)

志賀 その年の中央公論の秋の特別号に出す小説の終りの方を西石垣の枡屋といふ家で書いてゐたが、長田君も同じ号に出す小説を近くの宿屋で書いてた。⁽⁴⁾「尼僧」

1 夏目さん 夏目漱石 一八六七—一九一六年。小説家、評論家、英文学者。

2 四十五年ですよ 谷崎の京都滞在は、一九一二年四月から七月。このとき上田敏は満三十七才であった。

3 中央公論の秋の特別号に出す小説『中央公論』(一九一二年・九)に

発表された「大津順吉」を指す。志賀の一九一二年の日記には、「八月九日」「朝湯に入つて八時かの最急行にのる、汽車の中で清書をする」、「八月十日」「午后夕方に近かくなつて、清書の残りをして丁ふ」などと、京都での清書の様子が記されている。

4 「尼僧」 長田幹彦の小説。『中央公論』(一九一二年・九)に掲載の後、一九一二年十二月、初山書店より刊行。

だつたかな。

谷崎 ああ、「尼僧」です。

志賀 あの頃、ちやうど諷閣⁽¹⁾中でね、舞妓なんかダダリリの帯をしめずに「そんなり⁽²⁾」とかいつて、至極簡単な⁽³⁾なりでやつて来てたナ。

谷崎 幹さんは一遍帰つて、又出直して来たんですよ。それから幹さんは大規模に長くゐたんです。「尼僧」を書いてたのは、そのあとだ。

志賀 木屋町の川沿ひの家にゐたつて言つてた。

吉井 ああ、上木屋町の西村屋つていふ家です。

谷崎 (吉井氏に) 君はあの女は知らないの「黒髪⁽³⁾」の女は？

吉井 知つてますよ、ええ。

谷崎 僕は全然知らないんだけど。

吉井 あれはネ、金山⁽⁴⁾太夫といふ太夫さんなんだよ。

谷崎 太夫さんなの？ああ、さう……。

吉井 祇園に太夫さんのある時分だね、金山といふ名前から、隠し名前を「佐渡、佐渡」つて、みんなが言つてた。

谷崎 はーあ。

吉井 なかなかきれいな女でしたよ。

谷崎 あれは大正に入つてから後でせう、大分……。

吉井 ええ、もう大正七、八年になつてたんぢやないかな。

志賀 そんなにはならないだらう。

谷崎 さうはならないね。

1 諷閣^{りようかん} 「まことに暗い」の意。

天皇が、その父母の死に対して喪に服する期間。

2 そんなり 「そのまま」の意。

3 「黒髪」 近松秋江^{ちかまつあきえ}(一八七六—一九四四)の代表小説。一九二二年一月『改造』。続編と併せて、一九二四年七月新潮社より単行本として刊行、谷崎が序文を書いている。

4 金山太夫 小説「黒髪」のモデルとされる祇園の芸妓。
「この女のモデルは、秋江が大正四年に出会つた金山太夫こと前田志うで、彼の友人である長田幹彦によると、売れっ子ではあつたが、「色の黒い、痩せぎすの」「ぶきりやうな売笑婦」(『文豪の素顔』)だつたという。」(河野仁昭『京都 現代文学の舞台』一九八九・九、京都新聞社)

吉井 いや、さうですよ。あれの出たのが十何年……。

谷崎 ええ、出たのはさう。

吉井 もう大正も大分……。

谷崎 出たのは十何年、ええ、さう。だけど、それは事実より大分後だからね。

吉井 だけど、訪ねたんだ。「黒髪」の中に出てくる佗住居⁽¹⁾に……。

谷崎 安井の？

吉井 安井の菊水路地とかいふところでした……。

谷崎 あ、さう。

志賀 安井の家といふのは女の家だらう。

吉井 その時分は女の家でなく、露地の奥の汚ない二階を借りてまし

17頁 た

よ。

志賀 小説だと、女の家もあのへんだ。

吉井 さう。僕が訪ねたのは女が身を隠してから後のことで、その時の話にも女の行方をたづねて笠置の方へ出かけて行つたといふやうなことを言つてみました。

志賀 さう。

吉井 谷崎君はお多佳さんはいつ頃から知つてるの。

谷崎 その年からです。ですから、明治四十何年です。

吉井 志賀さんはお多佳さんを……。

志賀 僕は里見⁽²⁾に連れられて行つた。奈良へ住んでからのことだ……。あの人は

若い時はきれいだったの。

谷崎 いや、きれいぢやない、べつに——。年取つてもあんまり変らないですよ。

1 「黒髪」の中に出てくる佗住居

「大正八年の秋の始め頃のことだつたらう。何でもその時の私は、飄然と東京を去つて以来、信州の小諸

沓掛から越後路に入り、赤倉温泉に暫く滞留してゐた後、日本海沿ひの

北陸路を過ぎて大阪に往き、不図思ひ立つて高野山で僧房生活を営むこ

と一月あまり、山を下ると当時京都に佗住居をしてゐると聴いた、秋江

君のことを思ひ出して、長い間のひとり旅で人恋しくなつてゐる折柄、

直ぐに訪ねて往つたのであつた。

その当時の秋江君の佗住居といふのは、祇園の廓花見小路を通り抜けた、安井天神に近いところにあつた

(中略) その路次の奥の隠れ家の佗住みの二階に通されたのだが、そこ

は壁の破れには芝居の番附が貼つてあつたり、支那焼の風雅な火鉢が置

いてあつたりして、何処となく西鶴

若い時もあの通りで……。

吉井 年取ってからのほうがよかつたんぢやないかな。

谷崎 さうかな。尤も、僕だつて若い時のことは知らないんだ。三十五、六くらゐだつたかな。初めて会つた時は……。

吉井 美しいといふ方の女ではなかつたが、感じはよかつた。

谷崎 悪いといふんぢやないけど、色は黒かつたナ。若い時から。

吉井 この間、志賀さんが「文芸」の座談会⁽¹⁾で言はれた、慶応生れの老妓といふのは、だれ？

志賀 何てつたかなア。

谷崎 あれさ、ゑん吉。

志賀 ……。(首をかしげる)

谷崎 ゑん吉つて言ひやしないかな。

吉井 ゑん吉つていふのは、地唄の三味線⁽²⁾なんか弾いてた？

谷崎 ええ、ええ、八十……いくつ……。

志賀 二だとかいつてたナ。慶応二年生れた。

吉井 こないだのナニは、実に絢爛たるものだつたらしいね。八千代⁽³⁾の改名披露の……。

谷崎 あ、あれはよかつたよ。来りやよかつたのに……。実に惜しいことをしたもんだね。

吉井 連日満員だつたさうだよ。

谷崎 さう、その満員とか何とか、それも悪くなかつたけどね、その全体の空気が

の艶隠者を思はせるやうなところがあつた。」(吉井勇「秋江回顧」〔洛北随筆〕一九四〇・四、甲鳥書林、所収)

2 里見 里見淳 一八八八〜一九八三年。小説家。「白樺」同人。

1 「文芸」の座談会 志賀直哉・天野貞祐「対話・内村鑑三その他」〔「文芸」一九四八・一〕を指す。

2 地唄 江戸時代初期以来、主に関西で伝承された三味線歌曲。上方舞の伴奏(舞地)として用いられることが多い。

3 八千代 井上八千代四世。一九〇五〜二〇〇四年。京舞井上流家元。本名片山愛子。一九四七年、四世を襲名。先代の三世(片山春子)は、「都をどり」の創始者で、京舞井上流を發展させた。

が実に華やかでね。昔のしばや⁽¹⁾、いつたやうだった。みんな瓢亭や何かのお弁当を持つてね。

吉井 八千代といふひとは、うまいですね。

谷崎 うまい。——けども、ナンのはうが先輩ぢやないかな。お佐多⁽²⁾のはうが——。うん。

吉井 さうですかね。お佐多さん、何やったの？

谷崎 三通りくらゐやつたんですよ。一つは「あづさ」といふのをやつて、それから「羽衣」をやつて、もう一つは何だったか、僕は見なかつたけど……。三日で變つて三^[18頁]度、九日間やつてね、その中の、僕は二度だけ見たんです。

吉井 いくつくらゐかな、今度八千代になつたお愛さんは？

谷崎 さう、さう。あれはまだ四十台だらうね。

吉井 さうだらうな。片山九郎衛門君の夫人なんだから。

志賀 あれは血筋はあるの。

谷崎 いや、血筋はないでせう。けども、とにかく井上流ではお佐多と八千代の二人だね何といつても。

吉井 もう一つ京都には何とかいふ流儀の舞があるんだつてね？

谷崎 篠塚流⁽⁴⁾。あれは亡んぢやつてね。若い時に習つたなんていふ人はゐるけど。

志賀 ああいふ地唄とか舞といふものを、京都の人はどう思つてゐるのかなやつぱり好きなのかな。

谷崎 案外さうでないらしいですね。かへつて東京のはうの人が、ああいふもの

1 しばや 芝屋。芝居小屋。

2 お佐多 松本佐多。一八七三〜一九五五年。祇園の芸妓。京舞井上流の舞踊家。この座談会に組み込まれているコラムの一つにその聞き書きがある。後掲。

3 片山九郎衛門 一九〇七〜一九六三年。本名片山博通。観世流シテ方の能楽師。

4 篠塚流 江戸時代の後期に、篠塚文三郎によつて創設された京舞最古の流派。一時断絶の時期を経て現在は復興、五世瑞穂が中心となって京都の様々な行事に貢献している。

の亡びるのを惜しんでゐる。

志賀 花柳⁽¹⁾が大分前から盛んに入つてきたからね。

谷崎 尤も、非常にむづかしいことはむづかしい。それでくたびれる。非常にしんどい踊りらしいですね。だから、芸妓や何かは厭がるらしいナ。

吉井 地唄、やるんぢやないの、谷崎君は。

谷崎 昔はね。——もう駄目ですよ。……とにかく地唄だつて富崎春昇⁽²⁾みたいな人が東京へ来ちやつたんだからね。

志賀 僕はね、さうだなア、今ラジオなんかで聴いても、地唄なんかが一番すなほに聴けるね。

谷崎 すなほですよ。とにかくすなほです。地唄を聴き慣れて江戸浄瑠璃⁽³⁾の長唄⁽⁴⁾でも清元⁽⁵⁾でも聴くと、やつぱり長唄でも清元でも聴いたあとで浪花節⁽⁶⁾を聴いたくらの感じの違いがあるね。どうしても、そのくらの違いがあるね、僕は。

吉井 成程、その位の違いはあるだらうね。

谷崎 さういふことを言つちや悪いかも知れないけど……。

志賀 東京のああいふ方面の芸人は地唄を全然認めないやうなことをいふね。聞の抜けた座頭声だ、なんて……。

谷崎 声は確かに座頭声の人が多いナ。すたれたのも、それが原因かも知れないけど。

志賀 だけでも、声として自然だな。

谷崎 僕はこなひだ富崎春昇⁽²⁾を聴いて、久しぶりに昂奮したナ。よかつたなア。
吉井 地唄ぢや富崎春昇⁽²⁾がやつぱり……。

1 花柳 花柳流。日本舞踊における流派の一。門弟は全国に二万人を数える。

2 富崎春昇^(ふさきしゅんしょう) 一八八〇～一九五八年。明治から昭和初期にかけて活躍した地唄演奏家、作曲家。富派家元。

志賀に「富崎春昇の思ひ出」(一九五八年)があり、谷崎から富崎を紹介されたことを記している。「地唄といふものは如何にも自然で、人間の声で唄つてゐる。邦楽の中には、随分人間放れのした声を出す物もあります。が、地唄は何処迄も人間の声で歌つてゐるといふ風感じて、私は何でも自然であることが好きなのです。ですから、地唄を大変面白く思つたのです。谷崎君が熱海の宿屋にわざわざ富崎さんを招んで、私らに聴かせてくれたことがある。七八年前のことです。」

3 江戸浄瑠璃 上方の義太夫節に対

谷崎 今一番だらうと思ふんだ。三味線と両方やるしね、声がなかなかいいし、それから会つてみたら、とても、君、面白い人ですよ。昔の菊原(1)検校みたいな人は、さういつちや悪いが、昔風のへんな卑屈な所があつてね、——人は非常にいい人なんだけど、オドオドしてるといふやうな所があつたけど、あの人はさうでない。なかなかハキハキしてる。

志賀 歳は……。

谷崎 七十前後だつたかな。

吉井 こなひだ、京都で会をやつたですね。

谷崎 ええ。京都へ初めて来たんですつて。あれは大阪の人でね、文楽の人形遣ひの子ですね。玉何とかいつたナ。……玉造ぢやない……。19頁とにかく、さういふ人の子ですよ。

志賀 玉助かな。

谷崎 それでね、ちひさい時から生一本に地唄の三味線を仕込まれてね、文楽の人形遣ひの子でありながら、團平の三味線さへ聴かされなかつた——。とにかく地唄の三味線ばかり聴かされて育つた。それだけ純粹だね、やつぱり。

吉井 井上流の舞つていふものは、やつぱり地唄が一番……。

谷崎 さう。僕はやつぱり地唄が……。

吉井 でも、常磐津(2)だの何だの、いろんなものをやつてますね。

谷崎 地唄と義太夫……義太夫節(3)なんだけど、義太夫ぢやないんですよ。或る一部分を義太夫節にしてあるの。舞ひに合わせるためにね。さういふことを義太夫語りも知らないんだから……。お師匠さんも知らないんだけど。

して、江戸の河東節、常磐津節、富本節、清元節、新内節などをいう。

4 長唄 三味線を伴奏楽器とする歌曲の一種。当初の江戸長唄、大坂長唄などの演者が江戸出身者によつて占められ、単に長唄とよばれるようになった。

5 清元 三味線音楽。浄瑠璃の一種。

歌舞伎や歌舞伎舞踊の伴奏音楽。

6 浪花節 語り物の一。江戸末期に大坂で説経節・祭文からでたもの。

1 菊原検校 一八七八〜一九四四年。地唄箏曲家。野川流三弦本手と生田流箏曲を伝承。

2 常磐津 常磐津節。浄瑠璃の一。

3 義太夫 大坂の竹本義太夫がはじめた浄瑠璃の代表的流派。

吉井 ははあ。

谷崎 さういふのに、なかなかいいのがあるナ。どうも常磐津だとか長唄だとか
いふのは、何だか調和しないナ。

吉井 しないね。

志賀 新内⁽¹⁾は殊に厭⁽¹⁾だけど、長唄も厭⁽¹⁾だナ。

谷崎 しかし、長唄は唄は厭⁽¹⁾だけど、合ノ手の三味線⁽²⁾だけは、なかなか名曲だと
思ふのも、たまにはありますね。例へば「秋の種草⁽²⁾」なんていふもの合ノ手な
んぞは、僕はやつぱりいいと思ふね。あれだけのものはなかなか作れないと思ふ
ね。

志賀 何だか、頭のとつぺんから出るやうな声を出すからね。

谷崎 声は悪いけど……。

吉井 地唄の中ちや、どういふものがいいんです。

谷崎 さうね……。

吉井 あなたが好きなのは。

谷崎 僕はやつぱり「雪⁽³⁾」。あれは短いけど……。それから「黒髪⁽⁴⁾」。短いもの
はわりあひ好きですよ。

吉井 やつぱり短いものがいんだらうナ、地唄は。

谷崎 それから「袖香炉⁽⁵⁾」といふのも名曲だナ。

志賀 「狐噲⁽⁶⁾」を君はこの前しきりに言つてたね。

谷崎 さう、さう。宮城道雄⁽⁷⁾と話した時ね。宮城さんのは放送で聴いたナ。

志賀 「狐噲」つていふのは、あれとは違ふの？ 狂言⁽⁸⁾の中の白藏⁽⁸⁾主。

1 新内 新内節。浄瑠璃の一流派。
独特な情緒をもつ。

2 「秋の種草」 長唄の曲。秋の情
景を唄い、「前弾き」「虫の合方」
「琴の合方」、あるいは上調子など、
三味線が活躍する名曲。

3 「雪」 谷崎には「解説」に紹介
した「雪」（一九四八年）のほか、
「細雪」に妙子が「雪」を舞う場面
がある（中巻・三）。

4 「黒髪」 地唄の代表的な曲。

5 「袖香炉」 地唄の曲。伽羅香を
たくさまを表している。

6 「狐噲」 地唄の曲。母を恋う狐
をうたっている。

7 宮城道雄 一八九四〜一九五六年。
生田流箏曲演奏家、作曲家。洋楽を
取り入れた曲を多く創作。主作品は
「越天楽変奏曲」「春の海」など。

8 白藏主 狂言「釣狐」の登場人物。

谷崎 白藏主とは全然違ひます。——こなひだ、富崎春昇が「残月」をやつてね。あれは三味線が主で、唄は非常に少ないんだけど、「残月」も非常によかつたですよ。英照皇太后²かな、昭憲皇太后³かな、非常にお好きだつたとかいふんでね。こなひだ菊五郎に会つたら、京都の片山の舞だけは亡ぼしたくないものだナ、というやうなことを、しきりに言つてたナ。

吉井 菊五郎は元氣なの。

谷崎 血圧が高いとか言つてたナ。

志賀 菊五郎もこなひだ皇太后さんの御覧になつた時は、非常によかつたつてね。菊五郎が力を入れてたんださうだ。その時に見た人ふたりから聴いた、それを——。だから、相当横着をやつてるんだナ、ふだんは。

谷崎 どうも血圧が高いといふことが肚にあつて、それで少し恐いんだらうと思ふナ。どうもそうだらうと思ふんですよ。

吉井 飲んでるの、お酒は。

谷崎 飲んでる。皇太后さま皇后さまかが御覧になつた時に、いま与市兵衛⁵をやつたのは誰ですか、と仰しやつた。照藏⁶でございます、と申上げたら、あとで山科の場か何かで腰元になつて出てくるんだね。あれがさつききの照藏でございます、つて申上げたら、ずるぶん変るものですね、つて仰しやつたつて。そんなことを菊五郎が言つてた。

吉井 こなひだの「合邦」⁷はよかつたですね。あれは意外によかつた。僕は悪いと思つていつたもんだから。

志賀 誰？

1 「残月」 谷崎の特に好んだ地唄「残月」に因む「残月祭」が、二〇〇二年から毎年七月に芦屋市で催されている。

2 英照皇太后 一八三三—一八九七年。孝明天皇の后で、明治天皇の母。

3 昭憲皇太后 一八五〇—一九一四年。明治天皇の皇后。

なお、皇室との関わりとして、谷崎は一九四七年六月に、京都大宮御所で、川田順、新村出、吉井勇とともに昭和天皇に拝謁した。また、吉井勇は一九四八年以降、歌会始の選者を務めた。

4 菊五郎 歌舞伎役者六代目尾上菊五郎。一八八五—一九四九年。

5 与市兵衛 歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の登場人物、おかるの父親。

6 照藏 歌舞伎役者二代目市川照藏。一八八六—一九二八年。

7 合邦 (撰州合邦社) 浄瑠璃。高

吉井 菊五郎の合邦がバカによかった。一生懸命にやつてたナ。やつぱり、あれは吉右衛門(1)といふ対象があるからぢやないかな。

谷崎 それはそうよ。無論さうよ。——いけないナ。話が京都からそれちやつて……。

志賀 いいぢやないか。のんびり話せばいいさ。

吉井 志賀さんは島原の太夫の道中といふものを見たですか。

志賀 見た。見た。ヘンな栈敷みたいなものがあつてね、そこでずゐぶん待たされて、一人が出てくると、次の一人が出てくるまで、待たされたナ。一人と一人の間がずゐぶん長いね。

吉井 この間戦争中やめてゐたのを、また復活してやつたんですよ。

谷崎 あれ、見なかつたナ。

吉井 寛政あたりから明治くらゐまで、それぞれその時代の風俗をしてやつたんですが、あれは時代風俗としても面白かつたナ。

志賀 あれは日向(2)で見ると、お化粧がちつともきれいでなくてね。

吉井 ええ。汗をかいたりしてあんまり美しいものではありません。

志賀 しかし、大変やまかし(3)い化粧だつてね。手間をかけて専門家にやつてもらふんだつてね。自分でするんぢやないつて。

20頁

吉井 今度は髪(4)の形からその時代のものにするので大変だつたらうと思ひます。しかし昔みたいな感じがかなり出てゐました。

志賀 輪違屋(5)はいつたかい。(吉井氏を見る)

吉井 あそこはゆかないけど。

安家の奥方玉手が魔の手から継子俊徳丸を守る苦衷と、玉手の父合邦の苦悩を描く。谷崎は、「所謂痴呆の芸術について」(一九四八年)において、義太夫について批判的な意見を述べているが、その中で、「合邦」を「最も典型的なもの」として、「いかに馬鹿々々しいものであるか」を詳細に記している。

1 吉右衛門(まぢえもん) 歌舞伎役者初代中村吉右衛門。一八八六—一九五四年。

2 輪違屋(わろちがい) 京都島原の置屋兼お茶屋。元禄年間に創業し、明治大正期に隆盛した。現在も営業されている。

志賀 あそこも規模は小さいけど、古い家で面白いナ。松本といふ家が一番新しいんだつてね。

谷崎 見るのは角屋⁽¹⁾か輪違屋がよくて、ほんとに買ふのは松本がいいんだつてね。僕は買つたことはないけど。(笑声)

志賀 君(吉井氏)の歌に出てくる女が出てきたよ、松本で。

吉井 いや、僕は……(大きく手を振つて)あの歌に出て来る太夫の名は出鱈目ですよ。

志賀 あの太夫の名は？

吉井 ええ、昔のものを見て……。つまり東京でいふ「細見」⁽²⁾みたいなものを見て入れたんです。

志賀 ああ、さう。それぢやー。

谷崎 今度の道中の傘止の太夫の名はなんて言つたかナ。

吉井 君太夫でせう。

谷崎 さう、君太夫。これは前に三津五郎の所の女中をしていたんだつてね。

吉井 島原では映画の女優だといふ話でした。

谷崎 あれ、ナンだつてね、太夫さんは紙は何枚使ふつていふことまで決つてたんだつてね。何枚以上使つちやいけないとか……。

吉井 島原の中でも、角屋は殆ど昔と変らないナ。松の間だけは焼けちまつたのですつかり新しくなつたけれども、緞子の間、扇の間、桧垣の間など、いまだに宝暦元禄あたりの匂ひがしてゐますよ。ああ、それから、角屋の庭に松がありましたらう、臥龍の松⁽⁴⁾つていふのが。

1 角屋^{まがや} もと京都烏原遊郭の揚屋。

建物^{たて}は町屋造に書院造・武家造をと
り入れた木造二階建てで多くの部
屋・座敷を持ち、重要文化財に指定
されている。平成十年から「角屋も
てなしの文化美術館」として開館。

2 細見^{さいけん} 妓楼名、遊女名などを細か
く記した遊里の案内書。

3 傘止^{かさどめ}の太夫 遊郭の太夫の道中時、
男衆がさしかける長柄の笠の最後で
あることから、その遊郭第一の太夫
をいう。

4 臥龍の松 角屋の松の間に臨む松。
その枝が長く伸びていることから名
づけられた。

谷崎 さう、さう。

吉井 あれは前のが枯れてしまったので、今その二代目として、現在僕の住んでゐる宝青庵の門の傍にあつた松がいつてるんです。

谷崎 ほう。

吉井 先日あなた方が来て下さつた時⁽¹⁾には、もうその松を角屋の庭に運んでしまつた後だつたのです。

志賀 相当大きい。

吉井 ええ、大きいんです。

志賀 あれは汽車の線路がすぐそばだから、やつぱりそのために枯れるんだナ……。

吉井 こなひだ道中を見る時について見たけど、果たしてうまくつくかどうかちよつと危つかしいやうな気がしてゐます。

谷崎 松はむづかしいだらうね。

吉井 それに移した時季が夏のかかりだつたから、如何かと思はれますよ。しかし、今度あの建物が重要美術に指定されたので、角屋の主人はいろいろと力を入れてゐるんです。

谷崎 あの建物？ さう。

志賀 あそこは入つた所なかなか面白く、それから青貝の間なんていふのも……。

吉井 青貝の間はいいですよ。露台があつたり、硝子戸があつたり、何処か南蛮趣味のところもありましてね。時に太夫の道中つていふのは、昔は春だつたでせ

1 先日あなた方が来て下さつた時
一九四七年十月、志賀と谷崎は、梅原龍三郎とともに吉井宅を訪問し、その日の午後、松花堂で、四人による座談会「あきのき、がき」（夕刊新大阪）を行なつてゐる。また、「実母の手紙」（一九四九年）によると、志賀はこの時、吉井から「私の古い日誌」を手渡されたが、それは志賀の旧宅から持ち出されて紛失してゐたもので、翌年一月の『新潮』に一部が発表され、単行本『奈良日誌』（一九四八年）として刊行される。その際、吉井が序文「序にかへて」を書いてゐる。「過日図らずも茅屋をおたづね下され候節は、御承知の通り、名さへ月夜田の里と申すやうな、京の田舎の佗住居のこととて、何のおもてなしも出来ず、甚失礼を致し申し候。」

う。

谷崎 春。四月の二十一日、二日……だと思つたがね。さうぢやなかつた？

志賀 さう。二十一日か何日かだつた。二十五日だつたか……。

谷崎 去年は秋にやつたね。 21頁

吉井 ええ。秋でした。ところで谷崎君、壬生狂言⁽¹⁾でいふのは見ましたか。

谷崎 いやあ、よほど前に……。この頃は見ないけど、この頃、又やつてゐるといふ話だナ。

志賀 僕も前に見たナ。

吉井 あれは戦時中でもやつてゐましたよ。

谷崎 ずるぶん永いこと見ないから、今度又見るかな。

吉井 僕は四、五年前に見たんだけど、まるで子供の遊び場みたいになつちまつてゐて、かなりうるさいと思ひました。しかし単調な鉦の音が聴こえて来るところは、相変わらずのんびりとしたものです。

志賀 土器割り……。

吉井 炮烙割り⁽²⁾でせう。

志賀 あ、炮烙割り。あれのために舞台の欄干の下に網が張つてあつてね。

吉井 あの網の中に割つた炮烙がだんだんたまつてゆくところなど、ちよつと古風で面白いですね。

志賀 役者が身体の真横を見せて、非常にハッキリした線を見せる——本物は知らんけど、写真なんかで見る、何てつたかな、氣違ひになつて死んだロシアの踊り手……。

1 壬生狂言 京都市中京区壬生の壬生寺に伝わる古典芸能。四月二十一日から二十九日までの九日間と十月中旬に行なわれる。演目は三十曲あり、「炮烙割り」のほか、「土蜘蛛」「紅葉狩」「花折」「餓鬼角力」「湯立」「棒振」など。無言の仮面劇で、大念仏狂言の一。重要無形民俗文化財に指定されている。

2 炮烙割り^(ほうらくく) 壬生狂言「炮烙割り」は、四月の大念仏会の公演で必ず最初に催される演目で、二月の節分会の際に奉納された炮烙が、この演目の最後に割られる。炮烙が割れると願ひ事が成就するとされている。

谷崎 ニジンスキイ⁽¹⁾？

志賀 あ、あれなんかと同じハツキリした線を見せてね、ちよつと面白いと思つたけどナ。

吉井 今残つてゐる京都の年中行事の中で、壬生狂言などはいいものですね。

志賀 「紅葉狩」も見た。

谷崎 「頼光」つていふのがいいんだつて？ 僕はそれ見ないんだけどね。

吉井 何か鬼が大勢出てくるのを見たナ。

志賀 それは何とか相撲といふ……。地蔵さんと鬼とが相撲をとる……。

吉井 「餓鬼角力」ぢやないんですか。

志賀 さうだつたかナ。地蔵さんと相撲とつて、鬼が負けてね、子供が助けられるといふ筋だった。それは壬生で見たんぢやなく、和田三造君⁽²⁾なんかが東京の三會堂でやつたのを見たんだ。

谷崎 東京へ連れて来て？

志賀 自分たちがやつたんだ。

谷崎 へーえ。

志賀 余興にね。その時、壬生狂言でいふのを初めて知つただけだね。「餓鬼角力」といふ名前の狂言だつたかナ。

吉井 あれは壬生狂言の中でも有名ですね。——(谷崎氏に) 近頃どうなの、お酒のはうは。

谷崎 いやア、血圧が下つたもんだから、つい、どうも……。

吉井 さう。でも、よくなつて、ほんとによかつた。

1 ニジンスキイ 一八九〇～一九五〇年。ロシア・バレエ団の花形であった舞踊家、振付師。

2 和田三造 一八八三～一九六七年。洋画家。谷崎の歌集『都わすれの記』(一九四八年)の挿面装丁にあたる。

組み込まれているコラムの一覧表

- ① 頼原退蔵 「文芸と遊里」
- ② 上村松篁 (絵と句) 「花の脊」
- ③ 三宅周太郎 「京都の芝居」
- ④ 河合卯之助 「五条坂の話」
- ⑤ 土居次義 「絵巻物と四条大橋」
- ⑥ 井口海仙 「光悦寺」
- ⑦ 松本佐多 「京舞のこと」
(後に掲出)
- ⑧ 新村出 「春興老情」
- ⑨ 桂文榮 「京の落語」
- ⑩ 金剛巖 「美人の埋」

谷崎 でも、君のやうには飲まないナ。さう沢山は飲めなくなつちやつてるから。

吉井 いや、僕も大分控へてるんです。まあ最大限五合くらゐ……。

谷崎 ああ、五合ね。僕はそんなに飲まない。五合飲んだら二日酔ひどころぢやないナ。とても駄目だ。

志賀 (吉井氏に) 毎日飲んでるの。

吉井 毎日。——さうですね、晩酌は一合。……八勺くらゐかな。[22頁]

谷崎 ただの八勺? 君が? へーえ。——僕もさうだ。八勺くらゐだナ。京都のはうと違って、こつちはお酒、ずゑぶん悪いでしょ。

吉井 さうだな。やつぱり酒は上方ですか。

谷崎 ここ(熱海)は合成就多いですね、どうも。

吉井 上鳥羽の増田徳兵衛⁽¹⁾氏が又酒の醸造を始めるらしいぢやありませんか。

この間新潟へ行つた時、会津八⁽²⁾さんから聴きましたよ。

谷崎 さう。それで僕に手紙を寄越してね、名前を考へてくれつて。でね、名前考へたらお酒もらへるだらうと思ふから、一生懸命考へてるんだけど。(笑声)

吉井 いい名前、ありますか。

谷崎 たくさんあるんだ。

志賀 山陽が「劍菱」⁽⁴⁾つていふ名前をつけて、始終そこから酒を買つてゐたつていふからね。きつと来るね。

谷崎 さう。(笑ふ)

志賀 山陽のおつ母さんがとても酒好きだつたから、国の方へも送らせてゐた。

谷崎 ああ、梅⁽⁵⁾。

1 増田徳兵衛 増田徳兵衛商店主。

創業延宝三年(一六七五)の京都伏見名門蔵。「にぎり酒 月の桂」は、

谷崎潤一郎をはじめ永井荷風や多くの文化人が愛好した。谷崎は、一四八年一月二十三日付の増田宛書簡で、いくつもの酒の銘柄の案を書き送っている。

2 会津八⁽²⁾ 一八八一〜一九五六年。

歌人・美術史家・書家。

3 山陽 頼山陽⁽³⁾ 一七八〇〜一八三

二年。江戸時代後期の歴史家、漢詩人、文人。陽明学者。

4 劍菱 灘五郷の一。五百年以上の

歴史をもち、日本で最初に商品名が冠された酒である。

5 梅⁽⁵⁾ 山陽の母の号梅颯の「颯」

が印刷されず、欠落している。

志賀 ところが、何を怒つたのか、後ちや山陽が剣菱のことをしきりに悪く言つたつてね。山陽といふのは悪どい奴で……。

谷崎 さう、さう。実際、悪どいですね。画料の請求なんかでも、実に悪どいね。その代り、妻子が困らないやうにはしたらしいけど。

(話が途切れて、静かに盃を啣まれる)

谷崎 (吉井氏に) 君は京都に住んでゐて、あそこで近所つきあひは？

吉井 え？京都の近所？

谷崎 つきあつてるの、近所と。

吉井 してますよ。

谷崎 尤も、大して家も多くないけど。

吉井 松花堂のほかはお百姓ばかりで、割合に家が少いので、先づつきあつてゐるのは、円福寺の老師、松花堂1の主人といつたやうなところです。

志賀 人氣は悪くないの？

吉井 悪いつていふんだけど、さう悪く感じられませんね、僕らには。

志賀 わりに引つ込んでる所だから、いいんぢやないかナ。街道筋だと……。

谷崎 とにかく人間はちよつとつきあひにくいね。ほんたうの京都の人といふものは、ね。

吉井 京都に来て十年になるが、如何も自然には親しめても、人間には親しめない。志賀さんもこの間の座談会で言つとられたけど、ちよつと京都の人はつきあひにくいナ。ほんとのことを言つてゐるのだから、心にもない嘘をいつてゐるのだから、何を言つてゐるのだから判らない。

1 松花堂 京都府八幡市にある日本庭園と美術館。国指定史跡。松花堂昭乗が江戸時代初期にかまえた方丈と庭園。

松本佐多「京舞のこと」

今年もまた、いつのまにやら、都踊の頃となりましたが、いろいろと都合がありました、踊が出来まへんのは、舞手にとつて、ほんまに心淋しいこととす。

それでも、この春は、女紅場にまごまごが改造の舞台をこしらえはつて、そこで都踊に代る井上流の舞の会を催しますので、若い舞手たちの血を沸かせてゐます。

志賀 實際に僕自身経験した事があるんだけど、三人が話をしているとするね、そのうち一人が便所に立つね、さうすると、あとの二人がその立つた人の悪口を言ふんだよ。今度はその人が帰つて来て、別の人が席を立つと、直ぐ二人がその人のことを悪く言ふんだ。僕がズーツとそこにゐて話を聴いてゐるんだが、僕がそれをどう思ふかといふやうなことに、全然平気なんだ。

谷崎 ああ、何とも思はない。

志賀 もう一人の人に聴かれてをかしいなんて思はない。さういふことは東京の人はちよつと気にするな。京都の人といつても皆がさうとは思はないが、一般的にいつてさういふ所があるやうだ。

谷崎 春日の——こなひだ一緒にいつたでせう、あそこのおかみさんは京都の人らしいんだけど、言つてたナ。とにかく、その家の門を出たら、もうそのお客さんの悪口を言ふ。お客さんは門を出たら悪口を言はれるものだと思つたはうがよう 23頁「ござんす、といふんだ。

志賀 さうなんだ。

谷崎 ほんたうのことは言はないね。大阪と京都はあんなに近いのに、ずるぶん違ふんだね。

吉井 奈良はどうです。

志賀 奈良もやつぱりさうだ。

谷崎 余計いけないかも知れない。田舎だから。

志賀 さう。もつといけないかも知れないナ。とにかく自分が働いて物を生産してゆくとか何とかいふナ二がないから。

祇園まちの井上流は、都踊のやうなもんやと、大衆向きやさかい、踊といふてますけど、井上流だけやをへん、上方では踊やのうて、舞といふのが、ほんまどす。さうどすさかい、京舞を見て貰ふのやつたら、都踊よか、こんどの舞の会を見てほしいと思ひます。

井上流の舞は、堅くろしいとか、動きが少ないとか、しんきくさいやうに、ゆわはりますけど、そこが踊やのうて、舞やさかいどす。ことに井上流では、地唄のやうな沈んだ陰気な地で舞ふ地唄舞やら、能から舞にした本行舞が特色どすさかい、さういふ心で見てもらわんなりまへん。さうすると、地唄舞の「口切」「袖の露」「袖香炉」「菊の露」「露の蟻」「三国」「本行舞の「葵の上」「羽衣」「若刈」「檉」「鉄輪」「松風」のやうな舞のねうちがよう解ると思ひます。

谷崎 ないです。

志賀 その点、大阪は忙がしいからね。それで違ふんだナ。

吉井 京都で「遊び屋」つていふのかな。金を持って遊んで食つてる人のことを、遊び屋、遊び屋つて言つてるね。

谷崎 それは道楽者のこと？

吉井 いや、働かないで……。

谷崎 あ、利息か何かで食つてるつていふ人のこと？

吉井 さう。

谷崎 それはもう今日の時勢では出来なくなつちやつた。

吉井 さうなんだけども。

谷崎 とにかく銭勘定の細かいといふことは大阪もさうだけど、大阪は細かいは細かいなりに、積極的に使ふ場合もあるし、使ふべき所と締まるべき所とを知つてるやうに思ふんだ。京都はもう消極的一方だナ。

志賀 京都の寺の話をしうか。寺とか庭とか……。

吉井 庭ぢや、どこがお好きです？

志賀 僕は、龍安寺だとか、西芳寺だとか、それから銀閣寺なんかもお好きだナ。新しい庭では無隣庵むりんあんがわりに好きだ。いいと思つたナ。

吉井 無隣庵はいいですね。

谷崎 僕も好きだ。

吉井 桂離宮けいりきゆうは。

志賀 あそこは、前には非常にいいと思つたんだけど、近年——つまり風水害の

いま、祇園ぎよんまちの芸妓げいぎで、井上流の舞の名取なとりがしよめて十六妓じふろくほどありますが、このうち四妓よんだけが先代三世井上八千代さんのお弟子です。

(堂本寒星どうほんせいき、書)

※なお、吉井は、一九五〇年以降、毎年「都をどり」の歌詞を作つている。井上流の舞の唄の作詞も手がけ、井上八千代についての言及もある。

1 無隣庵 京都市左京区にある庭園。
もと長州出身の元老山県有朋の別荘。
2 桂離宮 京都市西京区に所在するもと桂宮家の別荘。宮内庁所管。

あと、いつて見た時は、何かやつぱり前ほどに思はなかつたね。

谷崎 僕は非常に期待していつたせいかな、それほど思はなかつた。どうもパノラマみたいな感じがしてね。だから、西洋人なんかにはわりがいいんだと思ふんだ。庭の眺めがどうもパアツと浅くつて、パノラマみたいな気がするんだ……。

志賀 池の中や岸に石が出てくるね。銀閣寺のはそれが下から石で積み上げてあるだけさうだけであそこは松の杭で支へてあるんださうだ。松の木は水に漬つてればいくらでも保つといふからね。どうも、さういふことは古い庭程律気なやり方でない……。庭の龍居松之助（一）から聴いた事だが、何となく興ざめな気持ちになる。

吉井 手が抜いてある。

志賀 だから、何か重厚な感じが薄いやうに思つたナ。

吉井 ああ、松琴亭のそばなんか杉の木みたいなのがありましたね、たしか。

志賀 風水害以前？

吉井 以後。

志賀 以後はね、ずるぶん変つた……。

吉井 あれは何だ（二）が余計なものがあるやうな感じで……。

志賀 前とはずるぶん変つた。前は大きな樹がうまく折り合つてゐて庭全体の背景になつてゐたが、後に植ゑたのがよくないんだ。止むを得ない事だけど。

吉井 何だか纏つてゐなくてね。

谷崎 個人の庭でいいのがあるんぢやないですかね。あまり知られてない庭でいいのが……。

志賀は東洋の古美術を集めた豪華な写真集『座右宝』を、一九二六年に編集・発行している。その「庭園及建築」の部に桂離宮の写真を十葉も採り入れている。

1 龍居松之助 造園家。造園史家。東京農大教授。日本庭園美を広く海外に紹介した。

志賀 あるだらうけど……。

吉井 修学院⁽¹⁾は。

志賀 e 橋⁽²⁾が修学院をしきり 24頁 と褒めて、帝王の造つた庭だとか何と
か言つてるんだ。一方桂の離宮を落してね。その時、僕は一寸議論をしたんだけ
ど、大体あの二つの庭を比較するといふことをおかし。桂のはうはあれだけを
一つの世界にして造つた庭だし、修学院のはうは大きな自然の中であれだけの
のを嵌め込んで造つた庭だからね。

吉井 さう。

志賀 第一池の中にヘンな橋なんかあつてね。

谷崎 あつたね。

志賀 それで僕は修学院には好意を持たなかつただけど、最近、といつても四
年ほど前だが、下の方にある後水尾天皇⁽³⁾だつたかしら、その方の造られたとい
ふ小さい庭に感心した。

谷崎 あ、あれ、ありましたね。

志賀 あれに僕は非常に興味を持つた。座敷から直ぐ小さい城のやうな石垣があ
つてね。あれは僕はなかなかいいと思つたナ。

吉井 醍醐の三宝院⁽⁴⁾の庭はどうです。

志賀 あれは大分変つてゐるんぢやないのかしら。僕はどうもさう興味を持たな
いけどね。しかし何しろ水を豊富に使つてるね。

吉井 谷崎君の家のあたり、水の音が耳につかないですか。

谷崎 私はわりに好きなんだ、せんから——だから、水の音は厭ぢやないけど、

1 修学院 修学院しゆがくいん離宮りきゆう。京都市左京

区の比叡山麓にある宮内庁所管の離宮。後水尾上皇の指示で造営された。

桂離宮・仙洞御所とならび、王朝文化の美意識の到達点を示すものとなつてゐる。

2 高橋たかはし橋はし。実業家。引退後は茶道三昧の生活を送つた。

3 後水尾天皇 一五九六～一六八〇年。第一〇八代天皇（在位一六一一～一六二九）

4 醍醐の三宝院の庭 一五九八年、豊臣秀吉が「醍醐の花見」に際して自ら基本設計をした庭。国の特別史跡・特別名勝。

どうも地震といふことになると、あまり川のふちだから怖くなつちやつて……。

志賀 どうして？

谷崎 崖のそばで石崖があるから……。

志賀 だけでも、そんなに高くないから大丈夫だらう。

谷崎 まあ、大丈夫のやうに思つてるんだけど。

志賀 京都だったら、住むのはどこがいいかな。山科の山寄りの毘沙門堂⁽¹⁾近く
なんかはどうかな。

吉井 いいでせうがね、今は交通が大変だから……。

志賀 あの電車、混む？

吉井 ええ大変なもんですよ。

谷崎 嵯峨寄りのほうはいいな。あの電車はいい。

吉井 ええ。住むにも、あつちもいいかも知れないな。和田三造氏はあつちのは
うでせう。

谷崎 ああ、あれは中山さんの中の一棟、萱葺きの家に、ね。

志賀 あのへんも人氣が悪いんだつてね。

吉井 嵯峨つていへば、あれはどうしてるかな……。

志賀 照葉⁽²⁾。

吉井 ええ、照葉。

志賀 奈良にもあんだね。

谷崎 照葉が？

志賀 さう。

1 毘沙門堂 京都市山科区安朱稻荷
山町にある天台宗の寺院。

2 照葉 高岡智照尼。一八九六―
一九〇五年。本名高岡たつ子。一九〇
九年、十四歳で、大阪で芸者「千代
葉」として座敷に出る。十六歳で東
京新橋で「照葉」の名で名士のひい
きとなり、名をはせる。流転の後、
一九三四年、出家得度し、智照と戒
名し、三六年、京都祇王寺の庵主と
なる。瀬戸内寂聴の小説「女徳」の
モデルでもある。

吉井 あれは奈良の産だ。

志賀 僕らが奈良にゐた頃にゐただけで、公園なんか歩いてゐるのを見た事があるが、お白粉なんぞ付けてないせいかな知らないけど、色は黒いやうに思つたナ。谷崎 いやア、色は白いね。(吉井氏に) 君はよく知つてゐるだらう。

吉井 知つてゐますよ。以前あそこで時々野天の茶会をやつたことがあるのです。

谷崎 しかし、ねえ、京都が焼けないことを望むナ。あそこが焼けたら、ほんつに困る。

吉井 里見君の「若き日の旅」⁽¹⁾といふ小説にも、京都のことが出てゐたけれど、あの時は志賀さんも一緒ですね。

谷崎 月ヶ瀬へいつてる時のかナ。

志賀 さう。

吉井 法隆寺を見てから、e 浜虚子のところへ手紙を出したりしてゐますね。

志賀 さう、さう。

吉井 あの時は京都はどこへ。

志賀 泊つた所？ 泊つたのは吉岡屋。三条小橋のね。その前にも僕は泊つて知つてたからね。地下室みたいな妙な……。高瀬川が鼻先にすぐ見える……。水面より座敷のほうが低いくらゐるなんだ。

吉井 あの時の旅は楽しさうだ 25頁 ナ。歌舞伎座か何かが出発点で……。

志賀 さう。團藏が仁木やつた、芝居だつた。

谷崎 月ヶ瀬はいいね。吉野の花は僕は感心しないけど、月ヶ瀬の梅はいいね。二、三度いつたけど、いいと思つたナ。

1 「若き日の旅」 一九四〇年五月
甲鳥書林刊。里見弴が一九〇八年春
に、志賀直哉、木下利玄と三人で関
西へ出かけた半年ほどの旅行をもと
にした小説。

2 月ヶ瀬 月ヶ瀬梅林。奈良市月ヶ
瀬。梅林の起源は一二〇五年とされ
ているが、名勝となつたのは、斎藤
拙堂著「月瀬記勝」(一八三〇年)
の影響が大きいといわれる。その他
韓聯玉「遊月瀨記」(一八一九年)
など、多くの書物や絵画に描かれた。

吉井 谷崎君は京都を書いた作品といふと、何かある？

谷崎 ないですよ。小説に書いたのは、ね。

吉井 志賀さんは大分ありますね。

志賀 さうですね。

吉井 「暗夜行路」⁽¹⁾でも大分京都が出てくるな。

志賀 だけでも、言葉なぞ目茶苦茶だから……。

谷崎 一番書いてるのは幹さん、(長田幹彦)ぢやないかな。

吉井 夏目さんもある。

谷崎 うん。それから虚子。

吉井 さう。虚子の「風流懺法」⁽²⁾が一番京都らしいかな。

谷崎 「虞美人草」⁽³⁾の中にも……。

吉井 さう。だけど……。僕は、「風流懺法」が好きだな。

志賀 京都の食べ物はどう？ 今は食べ物もアレだらうけど、どこがうまい？

谷崎 どこがうまいかなア。今はよく知らないな。

吉井 やっぱり瓢亭かなア。

谷崎 だらうなア。

志賀 それからお茶のはうの何とかいふ所があつたね。

谷崎 辻留。⁽⁴⁾

吉井 あそこはうまいですね。こなひだ、あそこの主人がフラーリとやつて来たが、

人間も仲々面白い。

谷崎 つじとめにかきでん。

1 「暗夜行路」 志賀直哉の長編小説。一九二一年一月—一九三七年四月『改造』。断続的に発表した。

2 「風流懺法」^{ふうりゅうせんぽう} 俳人高浜虚子の小説。一九〇七年四月号『ホトトギス』掲載。比叡山延暦寺横川での滞在や、祇園で遊んだ経験をもとに創作。

3 「虞美人草」 夏目漱石の小説。一九〇七年六月—十月『朝日新聞』連載。

4 辻留^{つじどめ} 裏千家からの指導をもとに京都東山に開いた懷石料理店。京都本店と東京店があるが、京都本店は御茶席等への出張料理専門。一九五六年に銀座に出店する際には、志賀・谷崎ほかが推薦文を寄稿している。志賀の「辻留」推薦」には、「昭和二十三年の頃下鴨の谷崎潤一郎君を訪ね、吉井勇君と一緒に御馳走になったのが二度目の辻留だつた。」とあり、谷崎が「後の潺湲亭」

吉井 柿傳(1)よりも辻留がうまいでせう。殊にあすこは汁物が得意ださうです。

志賀 鰻はやつぱり上方式かな。

吉井 いや、近頃は竹葉亭が来てるし、神田川といふ家もあるし、東京式のがありますよ。

谷崎 僕はやつぱり京都へ帰りたいね。地震の風説などがあつても、やつぱり京都がいいと思ふ。

吉井 交通がわりによくなくて来たから、春と秋は京都冬は熱海と両方に住むことにしたらいいでせう。

谷崎 さうなの。

志賀 吉井君もこつちへ来たまへ。

吉井 僕も両方掛け持にするかなア。

に二人を招いて、辻留の料理でもてなしていたことが知られる。

1 柿傳なまで 京都市上京区にある享保年間創業の出張料理懐石料理店。京都表千家、武者小路千家などの茶事に出張している。

—— 高森松子 本専攻修士課程在学 ——